

卒業論文 2019 年度 (令和元年)

地理的に分散したシステムのためのステージング環境の設計と構築

慶應義塾大学 環境情報学部
廣川昂紀

地理的に分散したシステムのためのステージング環境の設計と構築

本研究では、地理的に分散したシステムの検証実験におけるコミュニケーションコストとヒューマンリソースのオーバーヘッドを解決するためのシステムを提案する。ブロックチェーンの基盤技術として知られる P2P ネットワークなどは、地理的に分散したノードによって形成されており、これらはクライアント・サーバ方式のソフトウェアに比べてテストが行いづらい。何故なら、実際に離れた地点に設置されたノードを用いてテスト用のステージング環境を構築するためには、多くの人手とその間でのコミュニケーションが必要になるからである。

そこで、OpenVPN と Kubernetes を利用することで地理的かつネットワーク上で論理的に離れたノードを統合管理できるステージング環境を構築する。特定のポイントから一斉にすべてのノードに対しての操作を行うことで、デプロイ作業やアップデート作業におけるコミュニケーションコストとヒューマンリソースを解決することが可能だと考えた。

本システムの実装後、実際にネットワーク上で別セグメントに点在するノードに対して特定のポイントから一斉にソフトウェアを起動、更新、停止できることを確認して、本研究での提案が実現可能であることを証明する。

評価として、BSafe.network にて本システムを使用した場合と使用しなかった場合で、作業工程数にどれほどの差が生じるかを検証した。結果、本システムを使用した場合には大きく工程数を削減することができ、本研究で課題とした地理的に分散したシステムの検証実験におけるコミュニケーションコストとヒューマンリソースのオーバーヘッドを解消可能にした。

よって本研究は、地理的に分散したシステムの開発における検証作業の効率性を促進し、システムの堅牢性の向上に役立つと考える。

キーワード:

1. 地理的に分散したシステム, 2. ステージング環境, 3. OpenVPN, 4. Kubernetes

慶應義塾大学 環境情報学部
廣川昂紀

Designing and Implementation the staging environment for geographically distributed system
--

The purpose of this study is proposing the system to solve an overhead of communication costs and human resources in a staging environment of geographically distributed systems. The test for geographically distributed system such as P2P network, which is known as the basic technology of blockchain, is harder than client-server software. This is because it needs many communications and human resources to build a test staging environment consisted by distributed nodes that are located at remote points.

Therefore, we propose the integrated staging environment using OpenVPN and Kubernetes. The system can operate all distributed nodes from a specific point at the same time, it is possible to solve the overhead of communication costs and human resources.

After we implemented this system, confirm that it can deploy and update, stop the application on all distributed nodes. It proves that the proposal in this study is feasible.

As an evaluation, we verified how much difference in the number of work processes occurred when BSafe.network did not use this system and when it was used. As a result, when this system is used, the number of processes can be greatly reduced. Communication costs and human resource overhead can be eliminated.

Therefore, this study will promote the efficiency of test work in the development of geographically distributed systems, and will help to improve the robustness of the system.

Keywords :

1. Geographically Distributed System, 2. Staging Environment, 3. OpenVPN, 4. Kubernetes

Keio University Faculty of Environment and Information Studies
Koki Hirokawa

目次

第1章	序論	1
1.1	本研究の背景	1
1.1.1	惑星規模の分散システム	1
1.1.2	惑星規模の分散システムの発達	2
1.1.3	ステージング環境	2
1.2	本研究の課題と目的	3
1.2.1	本研究の課題	3
1.2.2	本研究の目的	3
1.3	本研究の仮説	3
1.4	本研究の手法	4
1.5	本論文の構成	4
第2章	背景	5
2.1	惑星規模の分散システム	5
2.1.1	モノリス	5
2.1.2	分散システム	5
2.1.3	惑星規模の分散システム	6
2.2	惑星規模の分散システムにおける使用技術と参考例	6
2.2.1	P2P	6
2.2.2	Winny	8
2.2.3	Gnutella	9
2.2.4	Bitcoin	9
2.3	ステージング環境	9
2.3.1	モノリスの場合	10
2.3.2	分散システムの場合	10
2.3.3	惑星規模の分散システム	10
2.4	コンテナオーケストレーションシステム	11
2.4.1	コンテナ	11
2.4.2	Kubernetes	12
2.5	OpenVPN	14
2.5.1	OpenVPN	15

第 3 章	本研究における課題定義と仮説	16
3.1	本研究における課題定義	16
3.2	課題解決における要件	17
3.2.1	実際性	17
3.2.2	統合性	17
3.2.3	拡張性	17
3.3	先行研究	17
3.3.1	独自実装のデバッグエージェントによる動作確認	17
3.3.2	PlanetLab	18
3.3.3	Emulab	18
3.4	本研究における仮説	18
3.4.1	実際性	19
3.4.2	統合性	19
3.4.3	拡張性	19
3.5	提案システム概要	19
第 4 章	実装	21
4.1	実装環境	21
4.1.1	ハードウェアおよびソフトウェア	21
4.1.2	物理サーバの準備	21
4.1.3	ネットワーク構成	22
4.1.4	VM の配置	22
4.1.5	ルーターの配置	24
4.1.6	OpenVPN の設定	24
4.1.7	Kubernetes クラスタの構築	25
4.2	システム全体	27
第 5 章	評価	29
5.1	実際性	29
5.2	統合性	30
5.3	拡張性	31
第 6 章	結論	32
6.1	本研究のまとめ	32
6.2	本研究の課題と展望	32
	謝辞	33

図 目 次

3.1 システム概要図	20
4.1 マスターノードとワーカーノードの関係性	26
4.2 ネットワーク構成図	28

表 目 次

4.1	使用したハードウェアおよびソフトウェア	21
4.2	ESXi の IP アドレス	22
4.3	Vlan ID と対応するアドレスプレフィックス	22
4.4	設置した VM の詳細	23
4.5	設置したルーターの詳細	24
4.6	OpenVPN 設定前の各サーバの疎通性	24
4.7	OpenVPN 設定前の各サーバの疎通性	25
5.1	新規ノード追加時の必要時間	31

第1章 序論

本研究では、惑星規模の分散システムのためのステージング環境の設計と構築を行う。

本章では、まず初めに惑星規模の分散システムを定義し、本研究の背景である惑星規模の分散システムの発達とシステムのステージング環境について概説する。次に、本研究の課題を明らかにした上で、目的を明確化し、目的を達するための仮説を示す。最後に仮説を裏付けるための提案手法を示し、本研究の概要を示す。

1.1 本研究の背景

本節では、本研究の背景について述べる。

まず初めに、本研究が対象とする惑星規模の分散システムとステージング環境について概説する。惑星規模の分散システムの定義にあたって、比較しやすくするため、別のシステムモデルであるモノリスと分散システムについても述べる。次に、惑星規模の分散システムの発達について述べ、その後に惑星規模の分散システムに求められるステージング環境について説明する。

1.1.1 惑星規模の分散システム

本研究における惑星規模の分散システムを定義する前に、惑星規模の分散システムとは別のシステムモデルであるモノリスと分散システムについて概説する。

まず、モノリスとはモノリシックなシステムを指し、本研究では単一のコンポーネントで構成されるシステムと認識する。

次に、分散システムはモノリスとは対称的に複数のコンポーネントが組み合わさって動作するシステムである。分散システムでは、複数の独立したコンポーネントが協調動作することによってシステム全体が成り立っている。

最後に、惑星規模の分散システムは、分散システムの中でも世界中に地理的に分散したコンピュータによって構成されるものを指す。システム全体が特定の箇所に収まらず、世界中のあらゆる箇所のコンピュータが協調動作することによってシステム全体が機能する点が特徴的である。具体的には、ブロックチェーン [1] が惑星規模の分散システムに属する。惑星規模の分散システムを支える技術としては、P2P が挙げられる。P2P は “Peer to Peer” の略であり、コンピュータ同士が対等な関係を築き協調動作する、中央集権的なサーバを必要としないシステムモデルである。クライアントサーバモデルのシステムのように、システム内に明確な役割分担と主従関係のあるシステムとは対照的である。クライ

アントサーバモデルでは、通信において常にクライアント対サーバで一对一の関係が成り立つ。クライアントはサーバに対してリクエストを送り、リクエストを受け取ったサーバは特定の処理に基づいてクライアントに対しレスポンスを返す。対してブロックチェーンのような P2P のシステムでは、参加するコンピュータの役割は状況に応じて柔軟に変化する。時にクライアントとして他のコンピュータに対して要求し、時に他のコンピュータからの要求に対して応答する。クライアントサーバモデルに比べて、耐障害性・冗長性・可用性において優れているのが特徴的である。

1.1.2 惑星規模の分散システムの発達

2000 年代初頭、Winny [2] や Gnutella [3] といった惑星規模の分散システムが頭角を現した。どちらのサービスも P2P 技術を基盤としており、それまでシステムモデルとして一般的であったクライアントサーバモデルとは異なる形態を採用したことで注目が集まった。P2P 技術が研究分野で取り上げられる頻度も多くなり、サービスとしても今後一層幅を広げていくと思われたが、クライアントサーバモデルに置き換わるまでの隆盛はなく後退していった。しかし、2008 年に Satoshi Nakamoto により Bitcoin のために開発されたブロックチェーン技術が登場することによって、再度 P2P 技術が脚光を浴びるようになり、開発や研究の勢いが再び盛んになってきている。

1.1.3 ステージング環境

ステージング環境とは、本番環境での運用をする前に実際の環境を想定してシステム全体のテストを行うための環境である。開発者が実際に開発を行う開発環境と実運用する本番環境では、環境の差異から動作の違いが生じ、手元で正常に動作していたものが本番環境に反映した途端動作しなくなるといった事象が度々発生する。そのような事態を防ぐために開発環境と本番環境の間に、本番環境を想定したステージング環境を構築し、本番環境へのデプロイ前にステージング環境にて動作を確認することで予想外の障害が発生するリスクを抑えることができる。惑星規模の分散システムにおいても、実運用での不具合や軽微なバグを早期に発見するためにステージング環境が必要である。モノリスの場合、システムは単一のコンポーネントで構成され、システムを構成するサーバの配置は開発者が任意に決定できる。よって、本番環境と同じ構成をオンプレ環境もしくはクラウド環境を用いて構築し、システムに対して任意の入力をした際に期待する動作がされるかどうかを確認すればよい。一方、分散システムの場合もモノリスと同じくサーバの配置は開発者が指定できるため、ステージング環境の構築は比較的容易である。しかし、分散システムは複数のコンポーネントから構成されるため、各コンポーネントのテストに加え、すべてのコンポーネントを通したシステム全体でのテストを行う必要がある。最後に、惑星規模の分散システムのテストはモノリスや分散システムに比べて難易度が高くなる。何故なら、惑星規模の分散システムにおいて、システムを構成するコンピュータは世界中に地理的に分散しており、開発者がシステム全体の構成を固定できないからである。システムには世

界中の至る場所からコンピュータが参加し、システム全体も常にスケーリングする可能性がある。惑星規模の分散システムのステージング環境の構築をする場合、地理的な場所を指定し分散させてサーバを配置する必要がある。

1.2 本研究の課題と目的

1.2.1 本研究の課題

本研究では、地理的に分散したシステムのためのステージング環境の構築と運用において解決すべき課題があると考えた。

通常、ステージング環境では必要となるサーバの設置、アプリケーションのデプロイ、修正を含んだパッチの適用などの多くの変更が行われる。AWS [4] や GCP [5], Azure [6] と行ったクラウドサービスや開発支援ツールが整った昨今、これらの殆どが自動化され開発者はサービス開発のみに集中できるようになった。

しかし、地理的に分散したシステムにおいてはこれらの恩恵を得られていない。クラウドサービスでは固定のゾーンが存在するためサーバの地理的な位置を自由に決定することができず、遠距離間でサーバを一斉にコントロールすることも難しい。結果的に、地理的に分散したシステムのためのステージング環境の構築と運用では、各地点のサーバ管理者による情報共有と個別の作業が必要になる。

つまり、各地点でのサーバの設置から不定期で頻繁に発生するアップデート作業まで全てにおいて、コミュニケーションコストの増大、作業時間と労力の消費、人為的ミス等の不安要素の発生といった課題点が予想される。

1.2.2 本研究の目的

本研究では、地理的に分散したシステムのためのステージング環境の構築手法を提案することを目的とする。

1.3 本研究の仮説

1.2.1 で述べた課題を解決するためには、地理的に分散したサーバを統合管理することで、ステージング環境での変更に対し柔軟かつ迅速に対応する必要があると考えた。

地理的に分散したサーバを統合管理するためには、

- ステージング環境に含まれるサーバ同士が、お互いに通信可能な状態であること
- ある特定の地点から全てのサーバに対して操作が可能であること

の二点を満たさなければならない。

本研究では、上記の必要要件を満たすことで 1.2.1 で述べた課題点を解決し、1.2.2 で述べた地理的に分散したシステムのためのステージング環境の構築手法の提案を達成できると考えた。

1.4 本研究の手法

本研究では、1.3 で述べた必要要件を満たすため、OpenVPN と Kubernetes を用いる。

まず、Kubernetes はコンテナオーケストレーションツールであり、コンテナ化されたアプリケーションのデプロイやスケーリングを自動化し、統合管理するためのシステムである。Kubernetes では複数のサーバでクラスタを構成しており、クラスタ化には各サーバがお互いに IP レベルで疎通可能な状態にななければならない。よって、Kubernetes は単一のデータセンター内での使用に適している一方、複数のデータセンターを跨がった構成での使用には適していない。

そこで、地理的に分散したサーバ間を結ぶ OpenVPN オーバーレイネットワークを構築することで、各サーバがお互いに IP Reachable な状態にする。OpenVPN とは、VPN ネットワークの構築をソフトウェアで実現するために開発されたオープンソースソフトウェアである。

本研究では、OpenVPN と Kubernetes を組み合わせ、地理的に分散したノード間で形成した OpenVPN オーバーレイネットワーク上で Kubernetes クラスタを構築した。別々のセグメントに位置するノードを用いて Kubernetes クラスタを構築し、コンテナ化したアプリケーションをクラスタ上にデプロイできていることを確認し、本システムの課題点を解決できているか推定することで要件を満たせることを確認した。

1.5 本論文の構成

本論文における以降の構成は次の通りである。

2 章では、地理的に分散したシステムとその実験的運用方法およびそれに伴う課題点について議論し、本研究の背景を明確化する。3 章では、本研究で着目する問題を解決するための要件、仮説と手法について説明する。4 章では、?? 章で述べた提案手法について述べる。5 章では、2 章で求められた課題に対しての評価を行い、考察する。6 章では、本研究のまとめと今後の課題についてまとめる。

第2章 背景

本章では本研究の背景と関連する技術について概説する。

まず初めに、幾つかのシステムモデルを交えながら惑星規模の分散システムについて定義する。次に、惑星規模の分散システムの使用技術である P2P について説明し、P2P 技術を用いたサービスを幾つか取り上げる。さらに本研究で対象とするステージング環境の定義と惑星規模の分散システムに必要なステージング環境について述べた後、本研究の提案手法で用いるコンテナオーケストレーションシステムと OpenVPN について概説する。

2.1 惑星規模の分散システム

本節では、本研究が対象とする惑星規模の分散システムの定義を明らかにする。定義を分かりやすくするため、先にモノリスと分散システムについて概説し、違いを明らかにした上で惑星規模の分散システムを定義する。

2.1.1 モノリス

モノリスとは、モノリシックなシステムを指す。モノリスは英語で一枚岩を意味し、システムにおいては、大きな単一のプログラムによって特定の処理を実行するアーキテクチャといえる。このように、本来では大量のコードによって成り立つという意味を含むが、比較化のため本研究では、プログラムの大きさに関わらず単一のコンポーネントで構成されたシステムをモノリスと呼ぶことにした。単一のコンポーネントで構成されるシステムはアーキテクチャがシンプルなため、システム自体が小さい場合は取り扱いやすい。しかし、システムが大きくなるにつれて機能同士の依存関係が密な状態になることで細かい粒度でテストを行えなかったり、チーム開発における並行作業が困難になる傾向にある。

2.1.2 分散システム

分散システムとは、複数のコンポーネントが協調動作することによって動作するシステムを指す。システム全体が複数の独立したコンポーネントを組み合わせて成り立っている点において、モノリスとは対照的である。各コンポーネントは異なる役割を持っており、お互いに協調動作することによってシステム全体が動作する。本研究で使用する Kubernetes も、コンテナオーケストレーションに必要な機能をコンポーネント毎に分割した分散システムである。Kubernetes に関する説明は 2.4.2 章で詳しく行う。分散システ

ムは複雑で取り扱いづらいように思われるが、実際には機能が細分化され各コンポーネントの役割が明確になる。機能同士の依存関係が希薄になるため細かい粒度でのテストが可能となり、障害時の原因特定も容易になる。チーム開発において開発者同士で同じ箇所を担当する可能性も下がるため、開発スピードが向上するというメリットもある。

2.1.3 惑星規模の分散システム

本研究で対象とする惑星規模の分散システムとは、??章の分散システムの中でも世界中に地理的に分散したコンピュータが協調動作することによって成り立つシステムを指す。近年注目を集めているブロックチェーンや2000年代初頭に登場したWinnyといったサービスが、惑星規模の分散システムにあたる。これらのシステムに使用されている技術や、サービスについての概説は2.2にて行う。惑星規模の分散システムは、システムを構成するコンピュータの場所を開発者が固定できないことと、システム全体がスケールアップしていく点で2.1.2章の分散システムとは異なる。開発者は、コンピュータの位置やスケールアップした際の挙動を考慮した上で開発を行わなければならない。よって、システムの挙動を左右する条件が2.1.1章のモノリスや2.1.2章の分散システムに比べて多くテストが難しい。

2.2 惑星規模の分散システムにおける使用技術と参考例

本節では、2.1.3章で概説した惑星規模の分散システムの主な使用技術とサービスの参考例について概説する。使用技術としては、P2Pが一番にあげられる。クライアントサーバモデルとは異なるシステムモデルであり、最近ではブロックチェーン技術にも取り入れられている。サービスの参考例では、WinnyやGnutella、Bitcoinについて触れる。Bitcoinは、先述したブロックチェーン技術を用いて動作するシステムであり、仮想通貨として広く世間に認知されている。

2.2.1 P2P

P2Pは“Peer to Peer”の略である。クライアントサーバモデルのシステムのように中央集権的な役割を担うサーバを必要とせず、コンピュータ同士が対等な関係を築く主従関係のなるシステムモデルである。

クライアントサーバモデルでは、クライアントがリクエストを投げサーバがレスポンスを返すという明確な役割分担がある。サーバはクライアントからのリクエストを待ち、リクエストが来たときのみ必要な処理を行ってクライアントへレスポンスを返す。対してクライアントは、サーバに問い合わせる必要がないときは何もせず、データを要求したり変更する必要が生じたときのみサーバとの通信を行う。よって通信は常にクライアントが起点となり、基本的にサーバ起点の通信は行われない。

対象的に、P2P では各コンピュータが対等な関係性を持つため、クライアントサーバモデルのような明確な役割分担がシステム上ない。P2P では各コンピュータが状況に応じてサーバとクライアントの役割を担う。各コンピュータは臨機応変にサーバとしてレスポンスを返し、クライアントとしてリクエストを投げる動的システムが特徴としてあげられる。

クライアントサーバモデルでは、リクエストを発信する側をクライアント、それに対してレスポンスを返す側をサーバと呼んでいる。対して P2P では、前述した通り各コンピュータは動的に役割を変化させサーバとしてもクライアントとしても動くことからサーバントと呼ばれる。単にノードと呼ばれることもある。

P2P の特徴

P2P では各コンピュータがサーバにもクライアントにも成り得るため、クライアントサーバモデルとは内部の実装も異なる。

まず第一に、データを保持する中央集権的なサーバが存在しないためアプリケーション上で必要になるデータは各コンピュータが保持する。アプリケーションの実装方式によっても異なるが、各コンピュータがデータを分割して保持する場合もあれば全てのコンピュータが同じデータを保持する場合もある。例えば、ブロックチェーンでは各コンピュータが全てのデータを保持しており（全てのデータを持たないタイプとしてシステムに参加することも可能）、データを相互で検証し合うことによってデータの改竄耐性を向上させ、堅牢性を担保している。また、ファイル共有システムである Winny では、各コンピュータが保持しているデータは異なるため、データを参照する際はどのコンピュータが目的のデータを保持しているか検索し対象となるサーバを決定してから通信を行うといった処理が必要となる。

次に、システムを動かすプログラムを各コンピュータが保持し動作させなければいけない点でもクライアントサーバモデルとは異なる。クライアントサーバモデルでは、システムのメインプログラムの実行はサーバの役割であるため、サーバのみがプログラムを保持しておけば良い。対して、各コンピュータが状況に応じて役割を変える P2P ではプログラムを各々で保持する必要がある。クライアントとして他のコンピュータが保持しているデータを参照したり、データを要求してきたコンピュータに対して応答をしなければならない。

P2P のメリット

本節では、P2P のメリットについて概説する。P2P システムの利点としては、拡張性（スケーラビリティ）・耐障害性があげられる。

まず第一に拡張性に関しては、クライアントサーバモデルの場合、利用者が増大するとシステムの中心であるサーバへアクセスが集中し、サーバやその周辺のネットワークへの負荷が高くなり、システム的な弱点になる。システム運用者は拡張性を高めるため、ネットワーク機器のスペックをあげたり、負荷が増大した際に自動でサーバの数を増やす

オートスケーリングなどの対策を取らなければならない。それに対して P2P の場合、コンピュータ同士は相互に通信を行うためアクセスは分散されやすくなる。その点で P2P は拡張性に長けている。

次に耐障害性である。クライアントサーバモデルの場合、何らかの原因でサーバが落ちるとサービス自体が停止してしまいサーバが構造上の単一障害点となる。しかし P2P ではどこかのコンピュータが停止したとしても、正常なコンピュータ同士で新たなネットワークを形成することで問題なくサービスを継続することができる。構造上の単一障害点が存在しないため、障害性に長けている。

P2P のデメリット

本節では、P2P のデメリットについて概説する。

第一に情報伝達における遅延があげられる。P2P では接続先のコンピュータが固定ではないため、状況に応じて接続先を変更する必要がある。すなわち、目的のデータを保持しているコンピュータを探し出したり、そもそもネットワーク上で近い距離に他コンピュータが存在しない場合、情報の取得や送信に遅延が生じてしまう。全てのコンピュータで同じデータを保持するブロックチェーンのようなシステムにおいては、コンピュータ同士がバケツリレーのようにデータを受け渡さなければならず、端から端までデータを伝えるまでに時間が掛かってしまう問題点がある。

次にシステム全体での管理のしにくさがあげられる。P2P システムでは各コンピュータでアプリケーションを動かすため、中央集権的なサーバと異なり、管理は各々のコンピュータ保持者に委ねられることになる。よって、たとえシステムに問題点が見つかりアプリケーション開発者がパッチを含んだアップデートバージョンを配布した場合でも、実際に動かしているアプリケーションがアップデートされるかどうかは保証されない。同様にシステム全体の監視を行うことも困難である。

2.2.2 Winny

Winny [2] はソフトウェアエンジニア金子勇氏が開発し、2002 年に発表されたファイル共有ソフトである。システム上で中央集権的なサーバを保持せず、コンピュータ同士が相互に接続することで実現される P2P アプリケーションとして注目を浴びた。ユーザはコンピュータ内に保持されたファイルを他のコンピュータと共有することができるため、任意のファイルをアップロードしたり、逆に他のコンピュータが保持しているファイルをダウンロードすることができる。Winny では、受信ファイルの送信元や送信ファイルの宛先をユーザが確認することはできず、バックグラウンドでの処理はユーザに見せないように高い秘匿性が担保されていた。クライアントサーバモデルのシステムアーキテクチャとは打って変わって出た新しい形のアプリケーションであったが、高い匿名性も起因して、一部のユーザが違法な音楽ファイルや動画ファイル、コンピュータウイルスを Winny にアップロードしたことで著作権法違反が問われた。開発者である金子氏にも疑いがかけら

れ 2004 年に逮捕，その後画期的な発明であった Winny も衰退していった．なお、金子氏は裁判を経て 2011 年に無罪となった。

2.2.3 Gnutella

Winny に同じく Gnutella [3] も中央集権型サーバに依存せず，コンピュータ間の通信のみでファイルの送受信を行うファイル共有アプリケーションである．ファイルと言えど、Gnutella では主に音楽ファイルが共有されていた。Gnutella は AOL（アメリカ・オンライン）社のチームが開発したものである。著作権保護の観点から、法的に違法性を問われ公開も開発もすぐに中止されてしまった。Gnutella では、最初のプログラムの起動時には、接続先を自動で認識できないためファイル交換や検索機能は使用できない。Gnutella のシステムへ参加したい場合は、メールや掲示板を通して他の Gnutella サーバの IP アドレスとポート番号を教えてもらい、自分の Gnutella サーバへ設定することで他のサーバとの通信を確立できる。通信確立後は、最初に接続した Gnutella サーバを通して他のサーバとも連携を取ることが可能となり、音楽ファイルの交換や検索を行うことができる。

2.2.4 Bitcoin

Bitcoin [1] は 2008 年に Satoshi Nakamoto と名乗る人物によって論文にて提唱されたものである。2009 年にはソフトウェアとして公開されており、今では多くのユーザに使用されている上、仮想通貨の先駆けとして他の仮想通貨を生む大きな起点となった。同時に、2000 年代後半に勢いを失っていた P2P システムの存在を再度世に知らしめ、開発の促進を促す起爆剤の役割を果たしたと考えられる。Bitcoin は基盤技術のひとつとして Winny や Gnutella と共通する P2P ネットワークを採用している。参加するコンピュータはそれぞれがシステム上のデータを保持し相互にデータを検証しあうことで、第三者的監視機関を必要とせずにデータの堅牢性を担保することが可能である。

2.3 ステージング環境

本節では、本研究で着目するステージング環境について概説する。

ステージング環境とは、システムのテストを行うための環境である。サービスを本番運用する環境と同じものをステージング環境として構築し、本番環境へデプロイする前に、開発したシステムが期待する動作を行うか確認する。ステージング環境で不備を発見した場合、本番環境への適応はせずに開発環境にて修正を行う。対してステージング環境でのシステムの正常な動作を確認できた場合は、本番環境へのデプロイ作業へ移行する。開発環境と本番環境の間にステージング環境を挟むことで、サービスの予期せぬ不具合や軽微なバグ等を早期に発見できる。

以下、2.1 章で概説したシステムのテスト方法ならびに必要なステージング環境について、それぞれ説明を行う。

2.3.1 モノリスの場合

モノリスは、単一のコンポーネントで構成されるシステムである。テスト方法は、システムに対して任意の入力を与えた際に、入力に対して期待する出力が行われるかどうかを確認すればよい。具体的には、特定の URL に対してリクエストを送信した場合に期待する Web ページが出力されるか、または Web ページのボタンを押した際に DB に対して期待する値が書き込まれるかなどである。システム内のコンポーネントはひとつであるため、テスト対象もひとつに限られる。ステージング環境の構築時には、モノリスなコンポーネントを用意すればよい。サーバを用意する場所については本番環境に合わせればよい。そのため、自社サーバを用いる場合はオンプレ環境に、クラウド環境を用いる場合は任意のクラウドサービスを使用してサーバを準備すればよい。

2.3.2 分散システムの場合

分散システムは、モノリスとは異なり、複数のコンポーネントから成り立つシステムである。分散システムのテストを行う場合、各コンポーネントに関してはモノリスと同じく、任意の入力に対して期待する出力が返されるかを確認すればよい。しかしモノリシックなシステムとは違う点として、コンポーネント同士の協調動作が正常に働いているかどうかを確認する必要がある。各コンポーネントが正常に動いた場合でも、システム全体が正常な状態にあるとは限らないからである。例えば、システム内の特定のコンポーネントに障害が発生した場合、システム全体としてはエラーを返して障害が発生したことを明らかにしなければならない。処理の巻き戻しや停止を行う必要がある場合もある。このような複数コンポーネントを跨いだ処理は、一連の流れを通した上で確認する必要がある。各コンポーネントのテストでは不十分である。一方、ステージング環境の構築においてはモノリスと大きな違いはない。本番環境を想定した場所にサーバを用意し、システムの動作に必要なすべてのコンポーネントを準備すればよい。

2.3.3 惑星規模の分散システム

惑星規模の分散システムは、分散システム同様複数のコンポーネントで構成されるシステムである。独立したコンポーネントがお互いに協調動作することによってシステム全体が動いている。2.3.2 の分散システム同様、各コンポーネントでのテストとシステム全体でのテストを行えば、システムが正常に動作することを保証できる。しかし、惑星規模の分散システムのテストにおいて各コンポーネントのテストは他のシステム同様に行えるが、システム全体のテストは容易ではない。何故なら、惑星規模の分散システムでは各コンピュータ（コンポーネント）は地理的に分散しており、ステージング環境の構築では地理的な場所を指定し分散させてサーバを配置したいからである。モノリスや分散システムの場合、サーバの配置は開発者が任意に設定できるため、本番環境と同じ環境を容易に再現できたが、システムの構成要素の配置と数を固定できない惑星規模の分散システムにおいては再現が難しい。とはいえ無限にスケーリングする可能性のある惑星規模の分散シス

テムを完璧に再現することは不可能であるため、地理的に分散させた幾つかのサーバによって構成されるステージング環境を構築する必要があると考える。実際に地理的に分散させたサーバによって成り立つステージング環境上で、コンポーネント同士の協調動作が正しく働いていることを確認できれば、対象の場所においてのシステムの正常性が担保される。

2.4 コンテナオーケストレーションシステム

コンテナオーケストレーションシステムは、コンテナ型仮想環境を統合管理するためのプラットフォームおよびツールを指す。2010 年代半ばから脚光を浴びようになり、今では世界的に数々のプロジェクトで本番環境に適用されている。サービスの立ち上げや運用過程において必要となる機能が数多く搭載されており、開発者は素早くかつ効率的に開発を進められる。コンテナは Virtual Machine（以下、VM）のデメリットを考慮して作られており、今後 VM の代わりを担う次世代の技術としてより一層注目されていく技術であると考えられる。

本研究では、コンテナオーケストレーションシステムとして Kubernetes を、CRI（コンテナ・ランタイム・インターフェース）として Docker を使用した。本節では、コンテナおよびコンテナオーケストレーションの概説と実際に使用した Kubernetes や Docker といったツールについて紹介する。

2.4.1 コンテナ

本節では、コンテナおよび Docker について概説する。

コンテナ型仮想化は、ひとつのコンピュータ上で仮想的に別のコンピュータを動作させる技術である。ホスト OS の上で動いている別のコンピュータをひとつひとつをコンテナと呼ぶ。

コンテナについて説明するにあたり、VM や物理マシンと比較しながら特徴を示していく。コンテナは、挙動としては VM と似ており、どちらも同じ課題を解決している。VM が登場する前、開発者はひとつのサーバ上で複数のアプリケーションを動作させることに頭を悩ませていた。何故なら、アプリケーションのうちのひとつがサーバのリソースを大幅に占有した場合、他のアプリケーションのパフォーマンスが低下してしまうからである。解決策のひとつとして、アプリケーション毎に別々のサーバ上で動作させるものがあったが、デメリットとして維持費が嵩むことと使用されない無駄なリソースが生まれてしまうことがあった。これを解決するために開発されたのが VM である。VM はソフトウェアによって仮想的に物理マシンを実現する技術であり、ひとつの物理マシン CPU 上で複数の VM を動作させることが可能である。アプリケーションはそれぞれ独立しておりお互いに不可侵な関係性であるため、ひとつのアプリケーションがリソースを占有することはなく、よりリソースを効率的に使用できる。スケーラビリティにも長けており、開発者はいつでもアプリを追加・削除でき、ハードウェアコストの削減にも貢献している。

しかし、VM は処理におけるオーバーヘッドが大きく起動時間が長いなどデメリットも存在する。VM の後に登場した技術がコンテナ型仮想化である。コンテナ型仮想化では、各アプリケーションはひとつのホスト OS を共有するため、VM より軽量で起動時間も短い。コンテナはコンテナイメージから作成され、イメージは宣言的なファイルに基づいて生成される。これによって開発者はより簡単かつスピーディに開発を進めることが可能である。“Build Once, Run Anywhere”というコンセプトが掲げられており、一度生成されたイメージはどの環境でも動作し冪等性が担保される。一方、ホスト OS を共有するためセキュリティ面では課題が見られる。

コンテナ仮想環境を構築するためのランタイムである CRI には、dockershim (Docker), containerd, cri-o, Frakti, rktlet (rkt) などが挙げられる。本研究では、CRI のデファクトスタンダードである Docker を採用している。

Docker

Docker [7] はコンテナ型仮想環境を実現するためのプラットフォームおよびツールである。前述したように Docker では、宣言的なファイルから生成したコンテナイメージを元にコンテナを起動する。設計書となる宣言的なファイルは Docker ファイルと呼ばれる。Docker ファイルでは、ベースとなるイメージをインポートしたり、特定のコマンドの実行やファイルのコピーを行うためのコマンドが提供されている。ミドルウェアや各種環境設定をコード化して管理することができ (Infrastructure as Code), 別の環境で何度実行しても同じ結果が保証される。Docker イメージをバージョン毎に管理するための Docker Hub というサービスがあり、開発者は自身のレポジトリにイメージをプッシュしたり、他のレポジトリからイメージを取得することも可能である。

2.4.2 Kubernetes

Kubernetes [8] はコンテナオーケストレーションエンジンであり、コンテナ化されたアプリケーションのデプロイやスケーリングなどの管理を自動化するためのプラットフォームである。

もともと Google 社内で利用されていたコンテナクラスタマネージャの「Borg」を基盤にして作られたオープンソースソフトウェアであるため信頼性が高く、現時点でコンテナオーケストレーションシステムのデファクトスタンダードとなっている。Kubernetes では、複数の Kubernetes Node の管理やコンテナのローリングアップデート、オートスケーリング、死活監視、ログ管理などサービスを本番環境で動かす上で必要不可欠となる機能を備えている。Docker 同様、デプロイするコンテナとその周辺のリソースは YAML 形式や JSON 形式で記述した宣言的なコードによって管理する。Infrastructure as Code に則っているため、実行環境に左右されず毎回常に同じコンテナが起動される。

GCP を筆頭にクラウド環境でもサポートされるようになり、現時点で AWS と Azure においても提供されている。そのため Kubernetes は徐々に注目を集めるようになり、今では多くの企業の本番環境で取り入れられている。

Kubernetes は、複数のサーバを束ねたクラスタの上で動作する。サーバの役割は二つに分かれており、システム全体を統合管理するサーバをマスターノード（コントロールプレーン）、実際にコンテナを起動させるサーバをワーカーノードと呼ぶ。マスターノードはシングルでも動作するが、基本的には冗長性や耐障害性を考慮して複数のマスターノードをクラスタリングすることが多い。クラウド環境を用いた場合、クリックひとつで Kubernetes クラスタを用意することができる。状況に応じてワーカーノードを追加・削除でき、自由にスケーリング出来る点も強みである。クラウドの種類によっては特定の条件に合わせて自動でノードのオートスケーリングを行うこともできるが、オンプレ環境では自前で実装する必要がある。

Kubernetes 自体は、多数のコンポーネントによって構成されるマイクロサービスアーキテクチャを採用している。すべてのコンポーネントが kube-apiserver と呼ばれる Kubernetes 内の API サーバを中心として動作しており、殆ど全ての処理は kube-apiserver を通して実行される。kube-apiserver はマスターノードに含まれる。他にもマスターノード内で動作するコンポーネントとしては、Kubernetes クラスタのすべての情報を保持する etcd、コンテナを起動させるノードをスケジューリングする kube-scheduler、ノード上で動作するコンテナを監視し必要に応じてコンテナを追加・削除するよう指示する kube-controller-manager などが挙げられる。対してワーカーノードで動作する主なコンポーネントには、kubelet などがある。kubelet を含め、本研究の実装で用いた kubeadm, kubectl に関しては以下で詳細に説明する。

Kubeadm

Kubeadm [9] は、Kubernetes クラスタを構築するためのベストプラクティスを提供するツールである。Kubeadm が提供するコマンドをいくつか以下に示す。

kubeadm init

クラスタの最初のコントロールプレーンとなるノードを起動する。

kubeadm join

クラスタに追加のコントロールプレーンまたはワーカーノードを参加させる。

kubeadm upgrade

クラスタのバージョンを最新へアップグレードする。

kubeadm reset

kubeadm init や kubeadm join によって生じた変更を取り消す。

kubelet

kubelet [10] は、Kubernetes クラスタ内の各ワーカーノードで動作するコンポーネントである。kubectl は、Docker などの CRI と連携して実際にコンテナを起動・停止する役割をもつ。具体的には etcd の情報を監視して、自身のノードに割り当てられてまだ起動していないコンテナがあれば起動する。etcd に格納された情報は、kube-apiserver や kube-controller-manager によって kube-apiserver を通して書き換えられ、実際のコンテナの操作に関しては kubelet が担うといった役割分担がされている。2.4.2 章の kubeadm, ならびに 2.4.2 章の kubectl は、Kubernetes クラスタ構築時や操作時に用いるコマンドツールであるのに対して、kubelet はコンテナの管理を行うデーモンとして動作する。

kubectl

kubectl [11] は、Kubernetes クラスタをコントロールするためのツールである。新規コンテナのデプロイや削除、アップデートから、動作中のコンテナやクラスタを構成するノードの情報の取得など、サービスの運用を支援する API が提供されている。kubectl が提供するコマンドをいくつか以下に示す。

kubectl get nodes

クラスタに参加するノードのステータスやロール（役割）、IP アドレス等を取得する。

kubectl get pods

ポッドの名前やステータス、再起動の回数等を取得する。

kubectl apply

ポッドに新たな設定を反映させる。

2.5 OpenVPN

本節では、本研究で使用した VPN 技術ならびにソフトウェア VPN である OpenVPN について概説する。

VPN とは、“Virtual Private Network” の略で、日本語では“仮想専用線”と呼ばれる。VPN は、インターネット上に擬似的なプライベートネットワークを実現する技術、またはそのネットワーク自体を指す。VPN を使用することで、インターネット上の異なるセグメント同士であっても、あたかも専用線で接続されているかのように通信することが可能である。VPN には L2VPN と L3VPN があり、L2VPN は異なるセグメント同士を接続しひとつの擬似的な LAN を構築するものであり、L3VPN では IP プロトコルでの通信が可能となる。セキュリティ面においては、通信内容をカプセル化することでパケットの中身の覗き見や改竄のリスクを低減することができる。

2.5.1 OpenVPN

OpenVPN [12] は、OpenVPN Technologies, inc. が中心になって開発しているオープンソースの VPN ソフトウェアである。

OpenVPN は幅広い OS でサポートされており、Window, Linux, Mac OS, iOS, Android で利用可能である。異なる OS 間でも利用可能であるため、ひとつの VPN ネットワーク内に異なる OS が混在していても正常に動作する。OpenVPN では、対応した OS のサーバがひとつでもあれば簡単に VPN サーバを構築することが可能である。VPN ネットワークに参加するためには認証が必要であり、OpenVPN では静的鍵による認証や証明書認証、ID/パスワード認証、二要素認証といった複数の認証方法から任意のものを選択できる。接続方法としては、ルーティングとブリッジが提供され、ルーティングは L3VPN、ブリッジは L2VPN に対応する。VPN ネットワーク内でブロードキャストを行いたい場合など、擬似的な LAN を構築したい場合以外は基本的に L3VPN を用いる。L3VPN にあたるルーティングでは、クライアントサーバ接続とサイト間接続が提供されている。クライアントサーバ接続では、各クライアントに認証設定が必要となり、接続の準備としてサーバ側での認証情報の生成が必要となる。認証情報を共有後、クライアント側では接続のために設定ファイルを用意し、コマンドやアプリケーションを用いて接続を行う。対するサイト間接続では、VPN の設定は各セグメントの VPN サーバで完結する。VPN サーバ間での接続が確立できれば、各拠点に配置されたサーバはお互いに疎通が可能となる。本研究の提案手法においては、ルーティング形式のサイト間接続を活用した。

第3章 本研究における課題定義と仮説

本章では、2章で述べた背景より、本研究における課題とその要件について議論し、先行研究および提案システムを概説することで本研究で用いるアプローチについて述べる。

3.1 本研究における課題定義

本研究では、惑星規模の分散システムのテストのためのステージング環境の構築が困難であり、未だ整っていないことを課題とする。2で述べた背景より、順を追って説明する。

モノリスや分散システムにおいて、開発者はサーバの配置や数を任意で決定することができる。そのため、本番での実運用をする場合にオンプレ環境を用いる場合はステージング環境もオンプレ環境に、クラウド環境を活用する場合はAWS [4] やGCP [5], Azure [6] といったクラウドサービスを利用することで、比較的簡単にステージング環境の構築を行える。最近では、AWSのEKSやGCPのGKE, AzureのAKSなどクラウドサービス上でフルマネージドなKubernetes クラスタをクリックひとつで用意することが可能となっている。

対して、冒頭で述べたように惑星規模の分散システムにおいてはステージング環境の構築が困難である。惑星規模の分散システムとは、分散システムの中でも地理的に分散配置されたコンピュータが協調動作することによってシステム全体が動作するものである。さらに、開発者はシステムに参加するコンピュータの配置を固定化することはできず、システム全体もスケーリングする可能性がある。よって、惑星規模の分散システムのステージング環境においては、実際に地理的な場所を指定し分散配置させたサーバが必要となる。サーバを分散配置させた場合、システム全体を統合管理することが困難になる。すべてのサーバに対し一斉にオペレーションを送ることが出来ないため、各地点のオペレータがアプリのインストールやアップデートといった作業を手作業で行う必要がある。オペレータ同士での作業の確認や手作業を考慮すると、ステージング環境でのテストの開始までに多くの時間が掛かり、何らかの修正を加える度にこれらの作業を繰り返さなければならない。

そこで本研究ではOpenVPNとKubernetesを活用し、地理的かつネットワークにおいて論理的に離れたサーバをオーケストレーションすることにより惑星規模の分散システムのためのステージング環境を提案した。

3.2 課題解決における要件

本節では、課題解決における要件を定義する。

惑星規模の分散システムをテストするためのステージング環境の構築には、サーバの配置に地理的な場所を指定し分散させる必要がある。さらに、テストを円滑に進めるため、物理的に離れた場所に置かれたサーバに対して統括的な指示を出せることが求められる。そこで、本研究の課題解決のための要件として、実際性・統合性・拡張性の三つを挙げた。

3.2.1 実際性

P2P システムの検証は、実際のネットワーク上で行う必要がある。テスト等の論理的検証では不十分である。P2P システムでは、状況に応じてノード同士の関係性・役割が変化し、条件が固定的でないからである。複雑な条件下での運用が必要であるから、ステージング環境においても、実際に地理的に分散したノードによるネットワークが求められる。

3.2.2 統合性

ステージング環境においては、ある地点から全てのノードを統合的に操作できる必要がある。現状、アプリケーションの配布・実行・停止等において多大なコミュニケーションコストとヒューマンリソースのオーバーヘッドが課題となっており、システム内のノードの管理に統合性を持たせることによってこれらのオーバーヘッドを削減する必要がある。

3.2.3 拡張性

ステージング環境では、アプリケーションの修正に伴うアップデートならびにノード数の増加・減少といった変化への柔軟性が必要である。P2P システムは刻一刻と変化するシステムであること。ノードの数によって関係性が変化する。また、ステージング環境では頻繁なアップデートが予想され、その際に生じるオーバーヘッドの削減が必要である。

3.3 先行研究

P2P システムのためのステージング環境の構築手法としては、すでにいくつかの先行研究が存在する。

3.3.1 独自実装のデバッグエージェントによる動作確認

既存の提案として、地理的に分散したノードを統合管理・操作するために別アプリケーションを独自で開発する手法がある。別アプリケーションとは、対象アプリケーションに対して命令を送信したり通信内容をログとして抽出するなどのデバッグエージェントして

動作する．ノードを統合管理出来る点では要件を満たしており，コミュニケーションならびに工数の削減に繋がると考えられる．しかし対象アプリケーションにパッチを適用したい場合，同様にそれを操作するデバッグエージェントにも変更を加える必要があり，変更への弱さが窺える．アップデートへの柔軟性が不足している限り，それによって生じるオーバーヘッドを削減することが出来ず根本的な解決に繋がらないと思われる．分散したノードを一斉にコントロールだけでなく，アプリケーションの停止や更新といった変更においてもより少ない手間で抑えられることが求められ，それを満たした際に地理的に分散したシステムの十分なステージング環境が成り立つと考えられる．

3.3.2 PlanetLab

惑星規模のサービスを開発するためのオープンなプラットフォームとして，PlanetLab [13] が挙げられる．PlanetLab は，新規サービスの開発をサポートするグローバルな研究ネットワークであり，900 以上のノードから構成される．2003 年から始動し，1000 人以上の研究者が分散ストレージ，ネットワークマッピング，P2P システム，分散ハッシュテーブルなどの新たな技術の開発のために PlanetLab を利用している．それぞれのノードは仮想マシンを提供しており，ユーザに割り当てられた仮想マシンのセットは Slice と呼ばれている．ユーザは socket API を通じて個別の開発環境を構築することが可能であり，ssh を通して仮想マシンにアクセスしアプリケーションをデプロイできる．

3.3.3 Emulab

分散システムや分散ネットワークを，ネットワークエミュレータによって構築された仮想的なネットワーク上で研究や開発する取り組みとしては，Emulab [14] が挙げられる．Emulab は大規模なソフトウェアシステムであり，仮想ネットワーク内に点在するマシン同士の接続環境を自由に設定することが可能である．ネットワークエミュレータを活用し，開発環境で大規模な分散システムのための開発環境を構築する手法 [15] も提案されている．数台のコンピュータ上に数千台の仮想環境をプロセスレベルで構築し，それらをネットワークシミュレータにより相互接続することによって，擬似的なネットワーク環境における動作検証を可能にするものである．

3.4 本研究における仮説

本研究では 3.2 章で述べた実際性，統合性，拡張性を担保しながら地理的に分散したシステムのためのステージング環境を構築したい．そこで，OpenVPN と Kubernetes を活用することで，それらの要件を満たしたシステムが構築できるのではないだろうかと考えた．それぞれの要件に対して，本研究で提案するシステムによる実現が可能であると考えられる点を本節では述べる．

3.4.1 実際性

OpenVPN を活用することで、ネットワーク上で論理的に異なるセグメントに位置するノード同士で疎通が可能なオーバーレイネットワークを構築することができる。さらに、IP Reachable な条件下であれば Kubernetes によるクラスタリングが可能である。よって、実際のネットワーク上にステージング環境を構築することが可能となり、P2P システムの検証における実際性が担保されることが考えられる。

3.4.2 統合性

Kubernetes 自体がオーケストレーションシステムであり、Kubernetes クラスタに参加するワーカーノードはマスターノードからの統合管理が可能である。そのため本研究では、P2P システムに参加するノードを Kubernetes クラスタのワーカーノードとして運用することで、マスターノードを経由したアプリケーションの配布や実行が可能となり、統合性が担保されることが考えられる。

3.4.3 拡張性

Kubernetes ではアプリケーションをコンテナとして動かすため、ワーカーノード内でコンテナ数を増減したり、コンテナのアップデートを行える。また、本研究では Kubernetes クラスタ構築時に kubeadm を使用しており、これを用いることで新たなノードをクラスタに参加させることも可能となる。これによって、修正が重なる可能性のあるステージング環境に必要な拡張性が担保されることが考えられる。

3.5 提案システム概要

提案システムの概要を述べる。ステージング環境において P2P システムに参加するノード同士を、OpenVPN を利用することで相互に疎通可能な状態にする。OpenVPN オーバーレイネットワーク上で Kubernetes クラスタを構築し、全てのノードをクラスタに参加させる。Kubernetes クラスタ内のマスターノードを介して、全てのノードに対して操作を行うことができる。

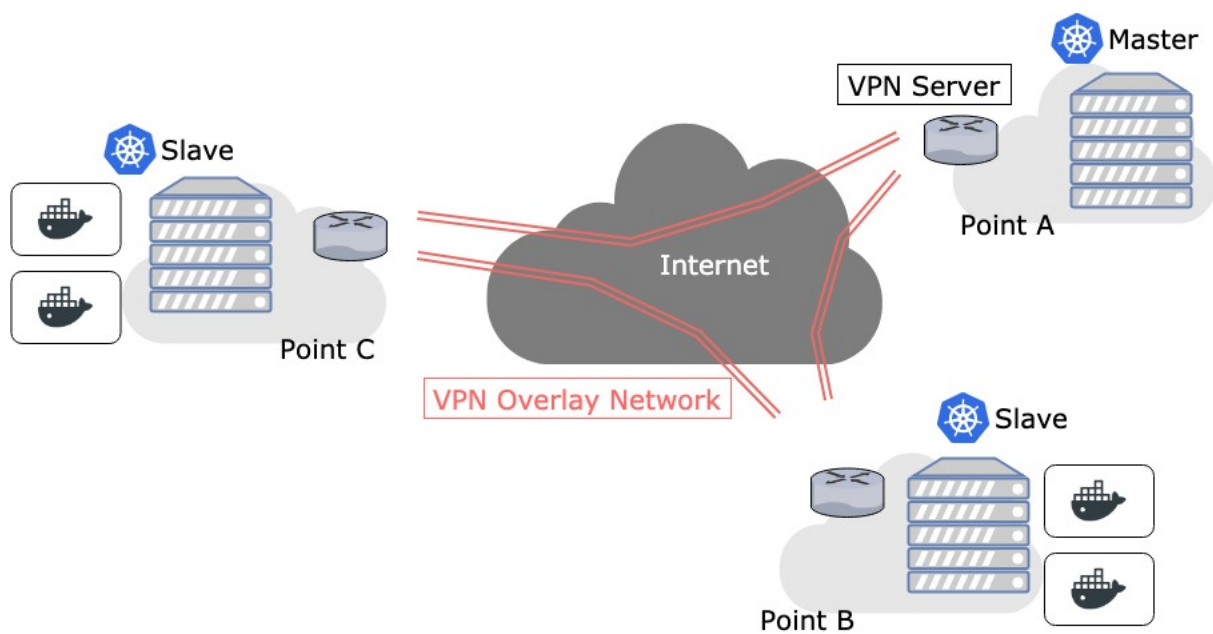


図 3.1: システム概要図

第4章 実装

本章では提案手法の実装について述べる.

4.1 実装環境

本節では, 本研究で構築した実装環境について概説する.

4.1.1 ハードウェアおよびソフトウェア

本研究で使用したハードウェアおよびソフトウェアとそのバージョンを以下に示す.

表 4.1: 使用したハードウェアおよびソフトウェア

ハードウェア/ソフトウェア	機種/バージョン
Server	FUJITSU PRIMERGY S6
VMWare ESXi	6.5
VyOS	1.2.1
OpenVPN	2.3.4
Ubuntu	18.04
kubeadm	1.16.3
kubelet	1.16.3
kubectrl	1.16.3
HA-Proxy	1.8.8

4.1.2 物理サーバの準備

本研究では, 実装において複数のセグメントおよび Kubernetes クラスタの構築に複数のサーバが必要であったため, それらを仮想的に作成できる VMWare ESXi (以下, ESXi) を導入した. 使用したのは, ESXi6.5 である. ESXi はホスト OS を必要とせず, 直接ハードウェアにインストールさせて動作させるハイパーバイザー型であるため, まず初めに ESXi インストーラのブータブルイメージを USB メモリに書き込み, FUJITSU サーバに

インストールした．計二台の FUJITSU サーバに ESXi をインストールし，それぞれ以下の IP アドレスを設定した．

表 4.2: ESXi の IP アドレス

名前	IP アドレス
1 台目	10.4.0.13
2 台目	10.4.0.14

4.1.3 ネットワーク構成

本研究で構築したネットワーク構成について説明する．

まず初めに，ESXi の仮想スイッチと VLAN を用いて二つの ESXi サーバ上に新たに計三つの論理セグメントを構築した．Vlan によって論理的にセグメントを分割することで，お互いに通信不可能な環境とした．以下に，Vlan ID と対応するアドレスプレフィックスを示す．なお，10.4.0.0/16 のアドレスプレフィックスは Vlan ID 0 に対応している．

表 4.3: Vlan ID と対応するアドレスプレフィックス

Vlan ID	アドレスプレフィックス
0	10.4.0.0/16
10	192.168.10.0/24
20	192.168.20.0/24
30	192.168.30.0/24

4.1.4 VM の配置

ネットワーク構築後，Kubernetes クラスタの構築に必要なサーバを VM として立ち上げた．それぞれの VM の OS には Ubuntu18.04 を採用した．以下に構築したサーバの詳細を示す．

表 4.4: 設置した VM の詳細

名前	ネットワークインターフェース名	Vlan ID	IP アドレス	役割
lb	ens160	10	192.168.10.253	マスターノードのロードバランサー
master01	ens160	10	192.168.10.101	マスターノード
master02	ens160	10	192.168.10.102	マスターノード
master03	ens160	10	192.168.10.103	マスターノード
node01	ens160	20	192.168.20.101	ワーカーノード
node02	ens160	20	192.168.20.102	ワーカーノード
node03	ens160	30	192.168.30.101	ワーカーノード
node04	ens160	30	192.168.30.102	ワーカーノード

4.1.5 ルーターの配置

次に各拠点に OpenVPN の設定をするルーターを設置した．ルーターの OS には VyOS 1.2.1, OpenVPN はバージョン 2.3.4 を採用した．以下にルーターのネットワーク情報を示す．

表 4.5: 設置したルーターの詳細

名前	ネットワークインターフェース名	Vlan ID	IP アドレス
vyos01	eth0	0	10.4.0.90
vyos01	eth1	10	192.168.10.1
vyos02	eth0	0	10.4.0.91
vyos02	eth1	20	192.168.20.1
vyos03	eth0	0	10.4.0.92
vyos03	eth1	30	192.168.30.1

全てのルーターはお互いに疎通可能である．さらに，各拠点に設置されたサーバと疎通できるよう eth1 のネットワークインターフェースには別の IP アドレスを設定した．この時点での各サーバの疎通性は以下の通りである．

表 4.6: OpenVPN 設定前の各サーバの疎通性

	lb	master01	master02	master03	node01	node02	node03	node04
lb		○	○	○	×	×	×	×
master01	○		○	○	×	×	×	×
master02	○	○		○	×	×	×	×
master03	○	○	○		×	×	×	×
node01	×	×	×	×		○	×	×
node02	×	×	×	×	○		×	×
node03	×	×	×	×	×	×		○
node04	×	×	×	×	×	×	○	

4.1.6 OpenVPN の設定

4.1.5 で示したように，OpenVPN の設定をする前ではすべてのサーバはお互いに疎通可能な状態にはない．Kubernetes は，クラスタに参加するサーバのすべてが疎通可能，厳密には IP reachable な環境下にある必要がある．そこで OpenVPN を用いて，複数の分離した LAN を仮想的に接続し Kubernetes の要件を満たそうと試みた．本実装では，OpenVPN の site-to-site モードを採用した．client-server モードを採用しなかった理由としては以下の二点が挙げられる．

1. Kubernetes は通信時にデフォルトゲートウェイに設定したネットワークインターフェースを使用するため，サーバ毎に OpenVPN を設定する client-server モードではトンネルインターフェースを通して通信ができない．
2. サーバ毎に証明書と鍵の管理が必要なため扱いづらい．

対して，site-to-site モードでは以下の利点が挙げられる．

1. ルーティングはルーターに任せられるため，サーバは通信時にデフォルトゲートウェイに設定されたネットワークインターフェースを使用できる．
2. OpenVPN の設定は LAN 内のルーターのみ．

以下に，OpenVPN 設定後の各サーバの疎通性を示す．

表 4.7: OpenVPN 設定前の各サーバの疎通性

	lb	master01	master02	master03	node01	node02	node03	node04
lb		○	○	○	○	○	○	○
master01	○		○	○	○	○	○	○
master02	○	○		○	○	○	○	○
master03	○	○	○		○	○	○	○
node01	○	○	○	○		○	○	○
node02	○	○	○	○	○		○	○
node03	○	○	○	○	○	○		○
node04	○	○	○	○	○	○	○	

4.1.7 Kubernetes クラスタの構築

OpenVPN による拠点間の接続を行った後，Kubernetes クラスタを構築した．本研究の実装では，Kubeadm を使用した高可用性 Kubernetes クラスタを構築するため，まず初めに複数マスターへのリクエストを振り分けるロードバランサーを設置した．ロードバランサーの構築には，HA-Proxy 1.8.8 を採用した．

```

1  frontend kubernetes
2      bind *:6443
3      option tcplog
4      mode tcp
5      default_backend kubernetes-backend
6
7  frontend etcd
8      bind *:2379

```



```

 9      option tcplog
10      mode tcp
11      default_backend etcd-backend
12
13  backend kubernetes-backend
14      mode tcp
15      balance roundrobin
16      option tcp-check
17      server master01 192.168.10.101:6443 check
18      server master02 192.168.10.102:6443 check
19      server master02 192.168.10.103:6443 check
20
21  backend etcd-backend
22      mode tcp
23      balance roundrobin
24      server master01 192.168.10.101:2379 check
25      server master02 192.168.10.102:2379 check
26      server master03 192.168.10.103:2379 check

```

上記の設定で、ロードバランサーのポート 6443 番とポート 2379 番へのリクエスを三台のマスターノードへと振り分けている。

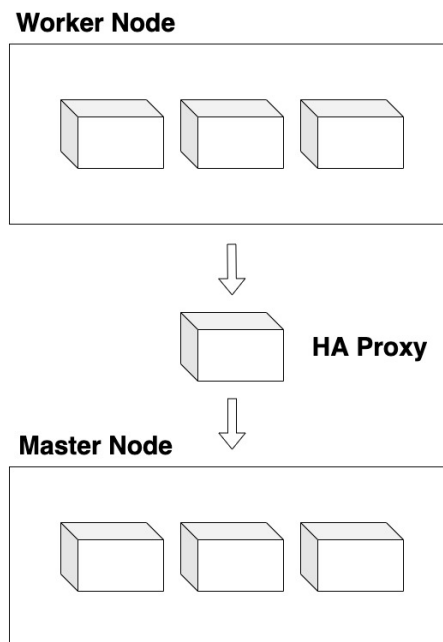


図 4.1: マスターノードとワーカーノードの関係性

次に、マスターノードとワーカーノードを立ち上げるにあたり必要なパッケージをインストールした。Kubernetes のランタイムとして使用する Docker に加え、クラスタ構築時に用いる kubeadm と kubelet, クラスタ操作時に必要な kubectl を apt によって取得した。パッケージの用意が完了したのち、マスターノードからクラスタ構築作業を行った。kubeadm ではクラスタの初期化用に init コマンドが用意されており、初めのマスターノードにて実行することでクラスタの基盤を作成可能である。初期化に成功した場合、以下の

ようなテキストが出力される。

```

1  You can now join any number of control-plane nodes by copying
    certificate authorities
2  and service account keys on each node and then running the
    following as root:
3
4  kubeadm join 192.168.10.253:6443 --token { token } \
5  --discovery-token-ca-cert-hash sha256:{ hash }} \
6  --control-plane
7
8  Then you can join any number of worker nodes by running the
    following on each as root:
9
10 kubeadm join 192.168.10.253:6443 --token { token } \
11 --discovery-token-ca-cert-hash sha256:{ hash }}

```

出力にある通り，与えられたコマンドを他のマスターノードとワーカーノードから実行することでクラスタへの参加が行える．各サーバにて上記のコマンドを実行した結果，マスターノードからクラスタが構築できていることを確認できた．

```

1  $ kubectl get nodes
2  NAME          STATUS    ROLES    AGE    VERSION
3  master01      Ready     master   58d    v1.16.3
4  master02      Ready     master   58d    v1.16.3
5  master03      Ready     master   58d    v1.16.3
6  node01        Ready     <none>    8d     v1.16.3
7  node02        Ready     <none>    4d22h  v1.16.3
8  node03        Ready     <none>    6d16h  v1.16.3
9  node04        Ready     <none>    8d     v1.16.3

```

4.2 システム全体

本研究で構築した実装環境の図を以下に示す．

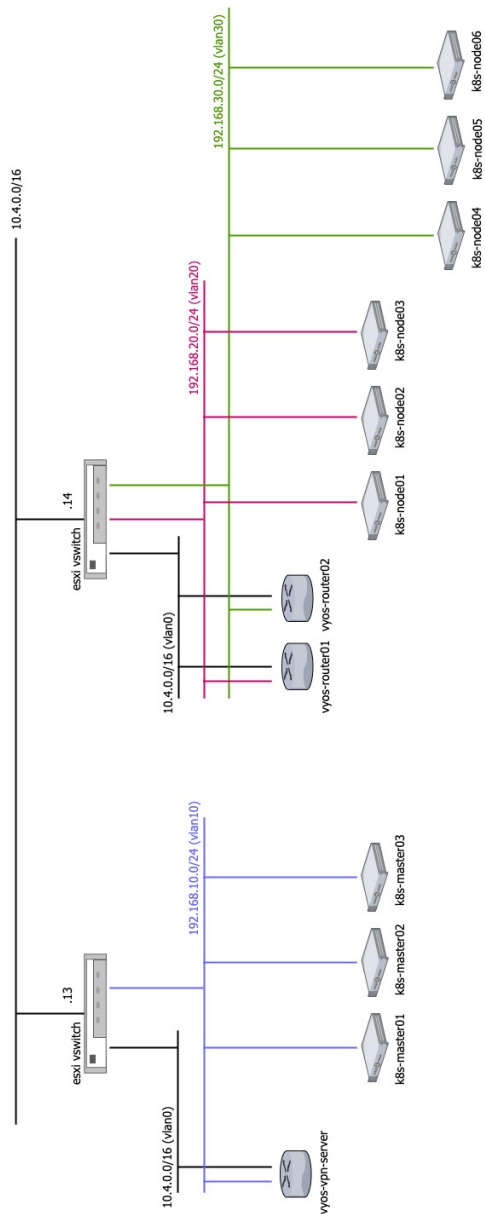


図 4.2: ネットワーク構成図

第5章 評価

本章では、本研究の提案が 3.2 で述べた問題解決における要件を満たしているか評価を行う。

5.1 実際性

実際性の評価をするため以下二点が実現されているか確認した。

1. 異なる LAN 内に配置されたサーバ同士がネットワーク上で疎通できているか
2. 複数の論理セグメントに跨って Kubernetes クラスタを構築できているか

一点目は、あるサーバから異なるサーバに対する ping コマンドを用いて疎通性を確認した。以下は、node01 (192.168.20.101) から master01 (192.168.10.101) に対して ping コマンドを使用した際の出力である。

```
1  $ ping 192.168.10.101
2  PING 192.168.10.101 (192.168.10.101) 56(84) bytes of data.
3  64 bytes from 192.168.10.101: icmp_seq=1 ttl=63 time=1.13 ms
4  64 bytes from 192.168.10.101: icmp_seq=2 ttl=63 time=1.50 ms
5  64 bytes from 192.168.10.101: icmp_seq=3 ttl=63 time=1.33 ms
6  64 bytes from 192.168.10.101: icmp_seq=4 ttl=63 time=1.03 ms
7  64 bytes from 192.168.10.101: icmp_seq=5 ttl=63 time=1.58 ms
8
9  --- 192.168.10.101 ping statistics ---
10 5 packets transmitted, 5 received, 0% packet loss, time 4006
   ms
11 rtt min/avg/max/mdev = 1.037/1.319/1.584/0.211 ms
```

二点目は、kubectl コマンドにてクラスタを構成するノードの IP アドレスを確認し、それらが別々のセグメントに位置することを確認した。

```
1  $ kubectl get nodes -owide
2  NAME                STATUS    ROLES    AGE      VERSION    INTERNAL-IP
   EXTERNAL-IP      OS-IMAGE             KERNEL-VERSION
   CONTAINER-RUNTIME
3  master01    Ready    master   58d      v1.16.3
   192.168.10.101    <none>              Ubuntu 18.04.3 LTS
   4.15.0-70-generic    docker://18.9.7
```

```

4  master02  Ready      master    58d      v1.16.3
    192.168.10.102  <none>      Ubuntu 18.04.3 LTS
    4.15.0-70-generic  docker://18.9.7
5  master03  Ready      master    58d      v1.16.3
    192.168.10.103  <none>      Ubuntu 18.04.3 LTS
    4.15.0-70-generic  docker://18.9.7
6  node01    Ready      <none>     8d       v1.16.3
    192.168.20.101  <none>      Ubuntu 18.04.3 LTS
    4.15.0-74-generic  docker://18.9.7
7  node02    Ready      <none>     4d22h    v1.16.3
    192.168.20.102  <none>      Ubuntu 18.04.3 LTS
    4.15.0-74-generic  docker://18.9.7
8  node03    Ready      <none>     6d16h    v1.16.3
    192.168.30.101  <none>      Ubuntu 18.04.3 LTS
    4.15.0-74-generic  docker://18.9.7
9  node04    Ready      <none>     8d       v1.16.3
    192.168.30.102  <none>      Ubuntu 18.04.3 LTS
    4.15.0-74-generic  docker://18.9.7

```

以上の結果より、論理的に隔離された LAN に跨って Kubernetes クラスタが構築可能であることを示した。よって、地理的に分散したシステムのためのステージング環境を実際のインターネット上に構築することが可能であると言える。

5.2 統合性

以下二点を明らかにすることで、統合性の評価を行う。

1. 特定のノードからステージング環境に属する全てのノードに対して一斉に指示を送ることができるか
2. 本研究の提案手法を用いず従来の手作業を含む手法を選んだ場合、工数にどのような差が生じるか

一点目は、`kubectl` コマンドを用いてステージング環境のワーカーノードに対して同時にアプリケーションをデプロイすることができたかを確認した。

```

1  $ kubectl create deployment --image nginx hello-world
2  $ kubectl get pods -owide
3  NAME                                READY   STATUS    RESTARTS
    AGE      IP            NODE      NOMINATED NODE   READINESS
    GATES
4  hello-world-c6c6778b4-5n74d  1/1     Running   0         4
    d22h     10.44.0.1    node01    <none>          <none>
5  hello-world-c6c6778b4-6mrj4  1/1     Running   0         4
    d22h     10.42.0.1    node03    <none>          <none>
6  hello-world-c6c6778b4-fmnext  1/1     Running   0         4
    d22h     10.47.0.1    node02    <none>          <none>
7  hello-world-c6c6778b4-r8b5w  1/1     Running   0         4
    d22h     10.44.0.2    node04    <none>          <none>

```

二点目は、まず従来の手法を用いた場合の作業工程を列挙し、提案手法との違いを定性的に評価した。ここでは複数の大学によって構成される研究ネットワークにて、新たに開発した地理的に分散したシステムをデプロイするケースを考える。

1. 各大学のリソース（OS, CPU, Memory）の共有
2. 各大学における作業内容の確定・共有
3. それぞれの大学のサーバ管理者とのスケジューリングの調整
4. 各大学でのデプロイ作業
5. 各大学からの作業完了の連絡
6. 全大学での作業完了の共有
7. ステージング環境の使用開始

上に列挙したように本研究の提案手法を用いない場合、ステージング環境で何かしらの変更を行う度に開発者間での多くのコミュニケーションと手作業が生じる。すべての作業が単独で並行に行われれば、作業中のミスによる中断やコミュニケーション不足による手戻りが発生する可能性もある。対して本研究の提案手法では、ステージング環境が統合的に管理されており、一括ですべてのワーカーノードに対して処理を実行できる。例えば、パッチを当てた修正版のアプリケーションを新たにデプロイする場合、作業は一コマンドで完結し、すべての処理は自動化されているため冪等性が担保される。

5.3 拡張性

拡張性の評価において、新規ノード追加時の必要時間を計測した。計測では、必要なパッケージのインストールに掛かる時間とクラスタへの参加時間の二つを対象とした。パッケージのインストールは Ansible を用いて自動化し、apt update から docker, kubernetes 等のインストール、リブートまでを含んでいる。クラスタへの参加時間は、kubeadm join に要した時間と、マスターノードでノードの参加を確認しステータスが Ready になるまでの時間を加算したものである。

表 5.1: 新規ノード追加時の必要時間

内容	経過時間
パッケージのインストール	509.50s
クラスタへの参加	105.86s

以上の結果から、新規ノードの追加に要する時間はパッケージのインストールからクラスタへの追加まで 10 分程度で行えることが確認できた。短い時間でステージング環境のスケーリングを行えたことを持って、拡張性を担保できていると考えた。

第6章 結論

本章では，本研究のまとめと今後の課題を示す．

6.1 本研究のまとめ

本研究では，地理的に分散したシステムの本番適応前の動作検証におけるコミュニケーションコストとヒューマンリソースのオーバーヘッドを解決するため，OpenVPNとKubernetesを利用したステージング環境の提案をした．着目した問題に対する解決策として実索性，統合性，拡張性の三つの要件が求められると考えた．第一に，OpenVPNを用いることでネットワーク上で論理的に離れたノード間での疎通性を獲得した．これによって対象のノードを開発環境から実際のインターネット上に拡張することができ，地理的に分散したシステムの動作検証に必要である実索性を満たすことが出来たと考える．第二に拡張性については，OpenVPNによるオーバーレイネットワーク上でKubernetesクラスタを構築することで，分散したノードに対し統合的な操作を可能にすることで解決した．第三に拡張性であるが，Kubernetesクラスタ上ではアプリケーションをコンテナ型仮想マシンとして動作させるため，容易にコンテナの追加や削除を行うことが可能である．加えて，kubeadmによりクラスタへ新規にノードを追加することも可能であるため，ステージング環境を自由に拡張することが可能である．よって拡張性も満たしていると考えられる．

6.2 本研究の課題と展望

本研究では，OpenVPNを用いたオーバーレイネットワーク上にKubernetesクラスタを構築した．すべてのノードはVPNサーバと接続し，Kubernetesクラスタ上での通信はすべてVPNサーバを通して行うが，本研究では参加ノードに対するVPNサーバの負荷とKubernetesクラスタへの影響までを測定することができなかった．実用に向けた次のステップとしては，VPNサーバの負荷とレイテンシについての詳細な実験をする必要性があると考えた．

謝辞

本論文の執筆にあたり，常に優しく，最後まで見捨てずにご指導してくださった慶應義塾大学政策・メディア研究科特任准教授鈴木茂哉博士，同大学政策・メディア研究科博士課程阿部涼介氏に感謝致します．お忙しいにも関わらず，毎週のようにミーティングを設けてくださったこと，研究について一から教えてくださったこと，行き詰まっている際に親身に相談に乗ってくださったことには本当に感謝しております．

参考文献

- [1] Satoshi Nakamoto. Bitcoin: A peer-to-peer electronic cash system. <http://www.cryptovest.co.uk/resources/Bitcoin%20paper%20original.pdf>, 2008.
- [2] 金子 勇. Winny の技術, 2005.
- [3] Gtk-gnutella. <http://gtk-gnutella.sourceforge.net/en/?page=news>.
- [4] Amazon web services. <https://aws.amazon.com/jp/>.
- [5] Google cloud platform. <https://cloud.google.com/?hl=ja>.
- [6] Microsoft azure. <https://azure.microsoft.com/ja-jp/>.
- [7] Docker. <https://www.docker.com/>.
- [8] Kubernetes. <https://kubernetes.io/ja/>.
- [9] Kubeadm. <https://github.com/kubernetes/kubeadm>.
- [10] kubelet. <https://github.com/kubernetes/kubelet>.
- [11] kubect1. <https://github.com/kubernetes/kubect1>.
- [12] Openvpn. <https://openvpn.net/>.
- [13] Planetlab. <https://www.planet-lab.org/>.
- [14] Emulab. <https://www.emulab.net/portal/frontpage.php>.
- [15] 米澤 明憲 西川 賀樹, 大山 恵弘. プロセスレベルの仮想化を用いた大規模分散システムテストベッド. https://ipsj.ixsq.nii.ac.jp/ej/?action=repository_action_common_download&item_id=18170&item_no=1&attribute_id=1&file_no=1, 2008.